

<修士論文要旨>**論文題目: ローカリゼーションにおける翻訳者の職務意識に関する考察****英文題目: A Study on the Work Experiences by Translators in Localization**

提出者: 鈴木理恵子 (Rieko Suzuki)

授与機関: 立教大学 (Rikkyo University)

取得学位: 修士(異文化コミュニケーション学)

学位取得の方法: 課程

学位取得年月: 2015年3月25日

本投稿は2015年9月13日、日本通訳翻訳学会第16回年次大会にて同題目で口頭発表した内容を要約、また追記しての補完を行ったものである。

Abstract

This study examined the work experiences of freelance localization translators through online surveys and interviews. Unique features of localization translation include decontextualized source texts, demands for quick turnaround, use of computer-assisted translation (CAT) tools, and requirements for following style guides and using terms in a translation memory. Question items in this study were configured to consider these hypothesized elements of translator stress. The findings were as follows: 1) A lack of contextual information in the source text was not the biggest factor in translator stress. 2) Translators did not have negative feelings about using CAT tools; while they recognized negative aspects of working with CAT tools, they positively evaluated features that facilitated consistency. 3) They felt stress about inconsistent client requests, such as demands for free translation while simultaneously following a style guide. The results suggest conflict in communicating with clients is the major element of stress for the translators.

和文要旨

本論文は、ソフトウェアの画面やそれに付随するテキストの翻訳である「ローカリゼーション」に携わる翻訳者を対象に、ストレスの要因という観点からアンケート調査、およびEメールインタビューを行い、彼らの職務意識を考察した研究である。ローカリゼーション関連の先行研究では、翻訳メモリの使用に関する課題や起点テキストの特徴などに着目し技術的側面から考察したものが多く、分野をローカリゼーションに限定したうえで翻訳者に焦点を合わせ、検討を加えた研究の数は限られているようである。各種翻訳支援ツールを使用しても、実際に翻訳をするのは「人」であり、人の生産性が落ちれば製品の発売が遅れたり、品質が下がれば企業の信頼が低下したりする可能性もあり、関係者への影響は大きいだろう。従って、作業者の心理や職務に対する意識を考察し、課題の検討と改善点を提案することは、円滑なローカリゼーションを目指す上でも有用な情報に

なりうると考えられる。

本研究では、先ずローカリゼーションの翻訳の特徴として先行研究で指摘されてきた次の点に着目した。1)「複数の目標言語への翻訳が、迅速かつ同時に実現され、固定した用語集を使用し、脱コンテキスト化した翻訳を促す」、2)「修正と更新が絶え間なく続く」、3)前のバージョンで使用した訳文を再利用することが多く「翻訳者が受け取るのは一貫性のある全体的なテキストという意味でのテキストではない」(ピム, 2010)。4)起点テキストの形式が多様で「翻訳の作業ファイルが HTML や XML 形式であったり、専用のエディタソフトで訳文執筆を行う必要があったりする」(山田, 2009)。

ハリデー (1998) によれば「テキストとコンテキストの密接な結びつきによって、読者や聴者は予測を立てる」とされる。コンテキストの情報は正確な訳出のために非常に重要な要素であるといえるだろう。しかし、前述のようにローカリゼーションの翻訳では、コンテキストの情報が非常に少ない。そこで本研究では、リサーチクエストとして「正確に翻訳するにはコンテキスト(原文の背景)の情報が重要なにもかかわらず、コンテキストの情報が少なく、全体像を把握する可能性がほとんど失われた状態で素早く訳出しなければならないローカリゼーションの翻訳者は、相当な葛藤(ストレス)を感じているのではないだろうか」という問いを立てた。この問いをもとに、さまざまなストレスの因子を想定した仮説を設定し、アンケート調査と E メールによるインタビューを実施して、ローカリゼーションにおける翻訳者に葛藤を引き起こす要因を検討した。この結果を受けて考察を深め、最終的にローカリゼーションにおける翻訳者の現状と葛藤をまとめた。また、浮き彫りになった産業構造の問題点も提示し今後の課題と共に結びとした。

研究の方法

本研究では量的・質的の両方のアプローチを組み合わせた「ミックス法/逐次的説明デザイン」(抱井・稲葉, 2011) を用いた。先ずローカリゼーションの翻訳者(フリーランス・在宅)に対してアンケート調査を実施し、量的データを収集して仮説の検証と因果関係の究明を行った。質問項目は「レヴィンの葛藤論」、「G.H.ミードの役割論」、「マーズローの自己実現理論(欲求説)」を理論的枠組みとして使用し、すべての項目に明確な仮説(ストレスの因子)を想定して作成した。仮説検証のための質問数は 55 項目で、その他、属性として最終学歴・専攻、翻訳およびローカリゼーションの仕事の始めてからの期間も設問に加えた。選択肢は 5 段階の間隔尺度で「そう思わない・どちらかといえばそう思わない・どちらともいえない・どちらかといえばそう思う・そう思う」を設定した。対象者へのコンタクト方法としては先ず、雪だるま式標本法/snowball sampling method(北澤・古賀, 2012)を採用し、筆者の知人や紹介で対象となる人を探して E メールで依頼し、その人の知人に該当者がいれば次々とアンケートを転送してもらった。さらに、先行研究で連絡先を公開している人や、フリーランスの翻訳者として情報をウェブ上に公開している人にも個別にコンタクトして依頼した。回答方法はオンライン・匿名形式で、指定した URL をクリックして画面上で回答してもらった(1 台の機器から回答できるのは 1 回のみを設定)。また、インタビュー可の人向けに連絡先の記入欄、および任意の自由記入欄も設けた。このアンケート調査は 2014 年 10 月～11 月に実施し、

合計 104 名にコンタクトして 26 名から回答を得た(回答率 25%)。得られたデータを設問作成時に紐付けた各仮説と照らし合わせながら検討し、葛藤とストレスの要因を考察した。

次に、E メールによるフォローアップインタビューを行い、先に実施した調査で得た知見をさらに掘り下げて回答の真意と事例を収集した。回答方法はオンライン形式で、設定した 25 項目の質問に対して自由に回答を記述してもらった。このインタビューは 2014 年 11 月～12 月に実施し、先のアンケート調査でインタビュー可と回答した人を対象とした。合計 12 名に依頼し 9 名から回答を得た(回答率 75%)。結果はストレスの想定因子別にコード化して質的内容分析を行った。以下、アンケート調査および E メールインタビューで設定した質問文の構成概念、調査結果と考察の一例を示す。

葛藤の要因:コンテキストの情報不足
<p>仮説(レヴィンの葛藤論・接近-接近型):理論にあてはめる 時間をかけてコンテキストを確認しながら翻訳をしたいが、素早く大量の翻訳もしたい (「～もしたいが、～もしたい」という葛藤の存在を仮定)</p>
<p>アンケート調査での質問:仮説の検証をする</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 時間をかけて原文の背景(コンテキスト)を確認しながら翻訳をしたい =>「そう思う」88% 2. 原文の背景(コンテキスト)の確認よりも翻訳のスピードを重視している =>「そう思わない」38%、「どちらともいえない」38% <p>考察:コンテキストの確認よりも翻訳のスピードを優先している人の割合が突出してはならず仮説は完全には合致しなかった。</p>
<p>E メールインタビューでの質問:アンケート回答の真意と事例を得る</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ローカリゼーションの翻訳ではどのようなときに翻訳のスピードが低下すると感じますか? =>「多数の参考資料」「使い慣れないツール」「なじみのない分野」 2. 原文の背景(コンテキスト)があいまいな場合、具体的にどのように対処して翻訳されていますか? =>「調べる」「推測」「あいまいに訳す」「原文に忠実に訳す」「クライアントに聞く」「申送りを付けて納品」 <p>考察:コンテキストの情報の過多よりは、参考資料の確認や慣れが翻訳スピードに影響を与えていた。</p>

結論

アンケート調査と E メールインタビューの結果の分析からは、次のことが明らかになった。まず、コンテキストの情報不足については、確かに正確な訳出をするのに戸惑うことはあるが、それがローカリゼーションの翻訳者にとって最大のストレスの要因ではないことが分かった。また、翻訳者の多くは情報技術に関する知識も豊富で、コンピュータ操作には全く翻弄されてはいなかった。翻訳メモリの使用も翻訳の品質に悪影響を及ぼすものとは捉えていなかった。誤訳が引き継がれる

という問題点を確かに認識してはいたが、むしろ整合性のある訳出のためには有用なものだと肯定的に考えている傾向が見られた。また、納期についても、短納期はストレスではあるが、逆に集中力やモチベーションの維持というプラスの側面として機能していることも判明した。翻訳メモリを使用する場合でも、やりがいが減少するとは感じていなかった。ローカリゼーションでは原文と同じような文の繰り返しが多いため、長くローカリゼーションの翻訳を続けている人は飽きを感じる傾向はみられたが、翻訳系の仕事をしていること自体には満足していた。フリーランスという形態も自らの意志で選択した人が多く、勤務形態に関する葛藤もほぼないことが明らかになった。

さらに、ローカリゼーションの翻訳者が最重要視しているのは「正確さ」「一貫性」「読みやすさ」であることが分かった。ゆえに、クライアントからスタイルガイドや用語集、翻訳メモリの訳語を順守し一貫性を保持することに加えて、意識も同時に要求される場合などに「読み手とするのはクライアントなのか、ユーザーなのか」という点で「役割内葛藤(intra-role conflict)」（船津，2008）を感じることが明らかになった。また「時間をかけて確認したくても納期が優先される」という状況において「純粋に質の高い訳出をするという翻訳のプロとしての役割」と「ソフトウェアの製造工程の一作業員としての役割」が混在し「役割間葛藤(inter-role conflict)」（ibid.）を感じていることも判明した。

以上をまとめると、翻訳者の最大のストレスの要因は原文の特徴でもなければ、ツールの使用でも、納期でも、勤務形態でもないことが分かった。翻訳者が最もストレスを感じていたのは「コンテキストのあいまいさ」ではなく、クライアントとの「コミュニケーションのあいまいさ」であり、ニーズの認識のずれから生じるクライアントとのコミュニケーション摩擦であった。

その他、約半数の翻訳者が機械翻訳の精度向上に関心を示したことも注目すべき点であった。プロの翻訳者が実感するほど機械翻訳の精度が上がり、かつ身近になってきていること（山田，2013）を考慮すると、スピードが重要視され、原文に繰り返しの表現が多いローカリゼーションでは特に機械翻訳の併用により、翻訳者の役割が益々変化してくる可能性があるといえる。また「海外の安いエージェンシーに発注が流れて、国内でのローカリゼーションの案件が減っている」、「海外のエージェンシーがローカリゼーションを請け負うことにより翻訳の品質が下がってきている」という回答者のコメントも無視できない現実を示すものである。役割の変化にどのように対応していくべきかという点も、ローカリゼーションの翻訳者における今後の課題であろう。

本研究はローカリゼーションの翻訳者からの視点でのみ調査し考察したものである。本研究によって明らかになった葛藤や課題を統合的に解決する糸口を見つけるためには、さらにクライアントやプロジェクトマネージャーなど、さまざまな立場の視点から調査する必要があるだろう。また、翻訳者の実務経験年数と各ストレス因子との相関関係など、更に視点を変えて考察を深めることにより新たな知見を得られる可能性もあると考えられる。

【謝辞】

本研究におけるアンケート調査にご協力頂いた翻訳者の方々に心より感謝申し上げます。

.....
【著者紹介】

鈴木理恵子 (SUZUKI Rieko)

2015年3月、立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科博士前期課程修了。IT関連企業にてローカリゼーションに従事。

.....

【参考文献】(本稿の引用文献のみ)

船津衛 (2008) 『コミュニケーション・入門』 有斐閣アルマ

ハリデー, M.A.K. & ハッサン, R. (1998) 『機能文法のすすめ』 (笥壽雄訳) 大修館書店 [原著: Halliday, M.A.K. & Hassan, R. (1985). *Language, context, and text: Aspects of language in a social-semiotic perspective*: Deakin University Press.]

北澤毅・古賀正義(編) (2012) 『社会を読み解く技法—質的調査法への招待』 福村出版

ピム, A. (2010) 『翻訳理論の探求』 (武田珂代子訳) みすず書房 [原著: Pym, A. (2010). *Exploring translation theories*. New York: Routledge]

末田清子・抱井尚子・田崎勝也・猿橋順子 (2011) 『コミュニケーション研究法』 ナカニシヤ出版.

山田優 (2009) 「翻訳技術の翻訳プロセスへの影響と可能性」『翻訳研究への招待』 第2号 (pp.133-144) [Online] http://honyakukenkyu.sakura.ne.jp/shotai_vol3/09_vol3_Yamada.pdf (2014年6月21日)

山田優 (2013) 「翻訳者の役割」 鳥飼玖美子(編著) (2013) 『よくわかる翻訳通訳学』 (pp.45) ミネルヴァ書房

